

唐沢古墳群の発掘調査成果

—発掘調査成果からみた三ヶ日地区の古墳時代—

浜松市文化財課 井口 智博

1. 唐沢古墳群の発掘調査成果

(1) 発掘調査の概要

浜松市北区三ヶ日町日比沢に所在する唐沢古墳群は、2基の古墳で構成される小規模な古墳群です。1基(2号墳)はみかん畑の開墾で既に失われており、1基(1号墳)が国有林内に残っていました。

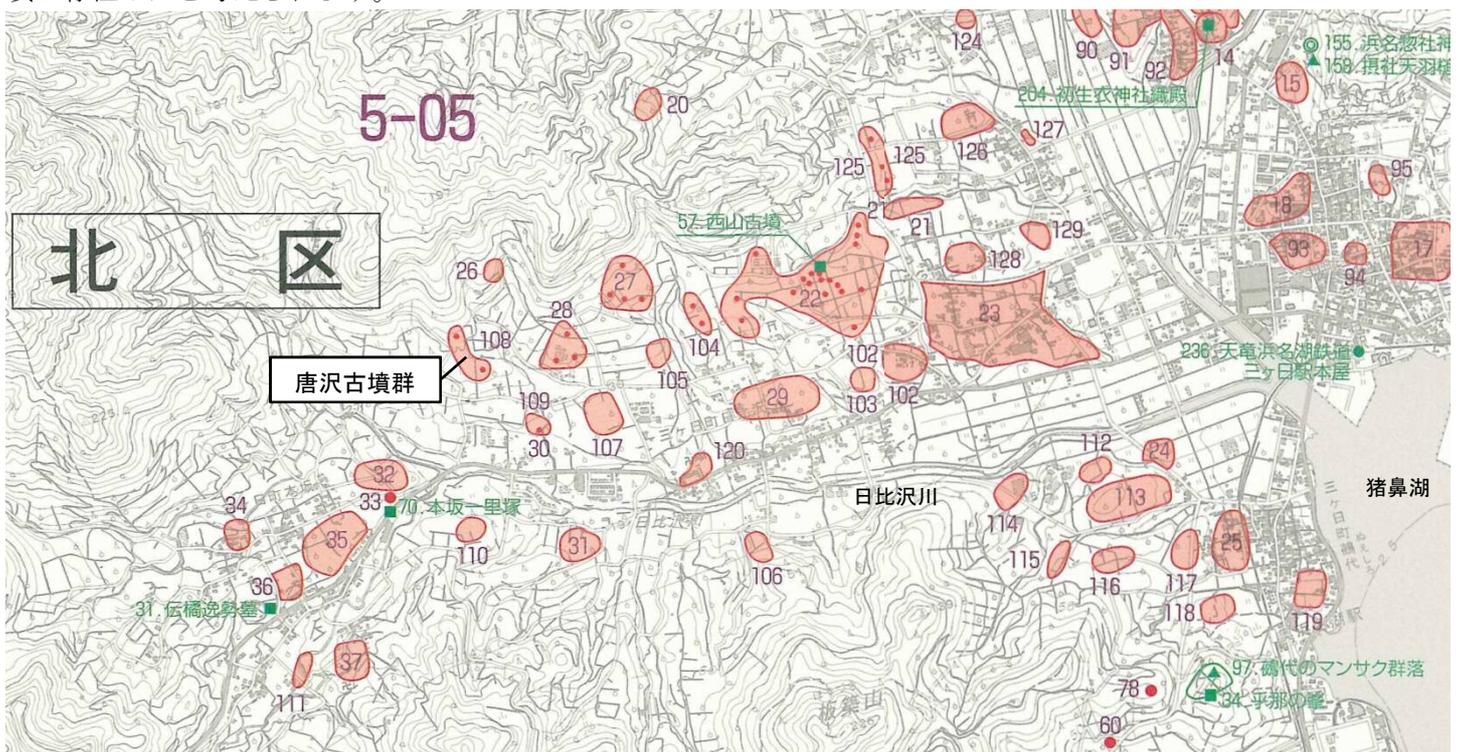
令和元年(2019年)に唐沢1号墳の立地する国有林が農地として開発されることになり、工事に先立ち静岡県埋蔵文化財センターが令和元年(2019)10月から12月にかけて発掘調査を実施しました。

発掘調査の結果、唐沢1号墳は7世紀後半に築造された直径8.9m、高さ1.45mの円墳であることがわかりました。埋葬施設は全長3.8m、幅1.2mの横穴式石室であり、立柱石をもたない無袖式石室であることを確認しています。

三ヶ日地区にはかつて多数の古墳が存在したとされていますが、特産品であるミカンの畑として古墳の立地する丘陵地帯が造成され、多くは破壊され消滅しました。発掘調査で内容が明らかになっている古墳が少ないことから、今回の唐沢古墳群の発掘調査は、三ヶ日地区の古墳の様相を知る上で貴重な成果と言えます。

(2) 立地環境

唐沢古墳群の立地する三ヶ日地区は、奥浜名湖の丘陵地帯となっており、古墳は湖や川を臨むことができる高台に築かれています。唐沢古墳群は、猪鼻湖に注ぎ込む日比沢川に面した丘陵斜面に位置しており、同じ丘陵斜面には日比沢高掛古墳群や日比沢北山古墳群などが立地しています。また、近傍には浜松市内最大の銅鐸が出土した猪久保遺跡があります。古墳群の周辺はミカン畑として切り開かれています。かつては多数の古墳が密集した群集墳が存在したと考えられます。



唐沢古墳群と周辺の遺跡 猪鼻湖に流れ込む日比沢川沿いに遺跡や古墳が分布している。

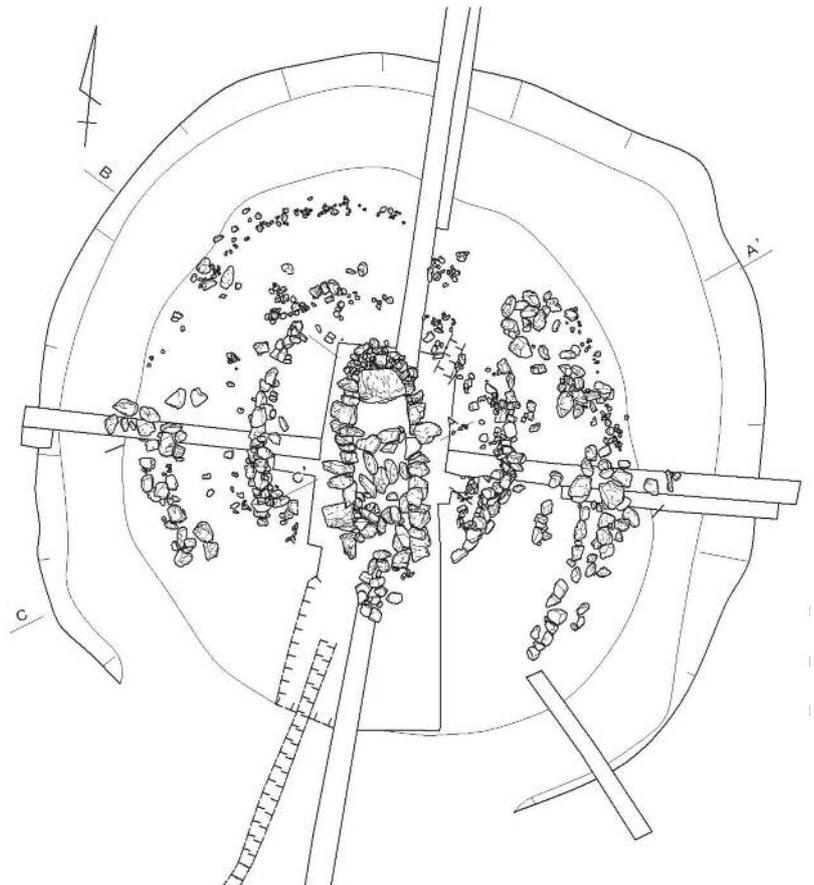
(2) 墳丘と外部施設

墳丘の上部は削られ、本来の高さより低くなっていましたが、周囲を周溝で囲まれた直径8.9m、高さ1.45mの円墳であることがわかりました。墳丘の裾には外護列石が確認できたほか、墳丘内部には角礫を配置した石列が確認できました。こうした外護列石や墳丘内石列は、隣接する三河地方の古墳にも認められる特徴です。



上空から見た唐沢1号墳 日比沢川を見下ろす南向きの丘陵斜面に立地する。古墳からは猪鼻湖を遠望することができ、東側に続く丘陵斜面には、かつて多数の古墳が存在したとされるが、ミカン畑の造成により、多くは発掘調査されることがなく姿を消した。

古墳群の南側には、近世に東海道の脇往還として機能した姫街道が横切っており、古来より三河地方を結ぶ交通路として栄えた。

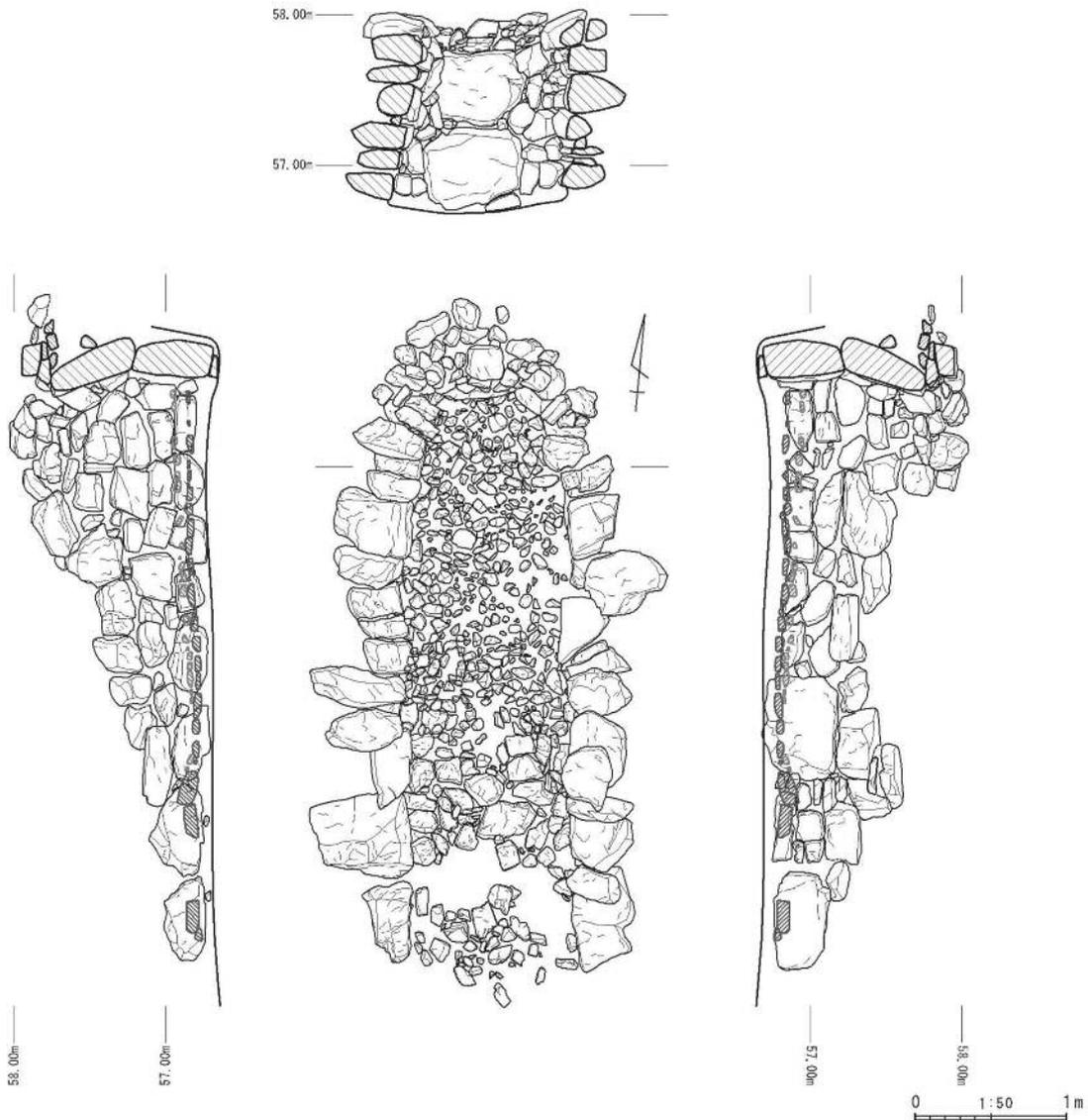


墳丘と墳丘内石列 墳丘の外周には周溝が掘られ、特に丘陵斜面と区画するために北側が深く掘り込まれていた。墳丘裾には外護列石が、墳丘内部には角礫を並べた墳丘内石列が認められた。石列は内側と外側の2列あり、墳丘盛土の崩落防止のため配置されたと考えられる。同様の特徴をもつ古墳は、愛知県豊橋市や豊川市でも確認できる。

(3) 埋葬施設

墳丘の中央部に、石を積み上げて築かれた横穴式石室が確認されました。石室の開口部付近（南側）は一部が破壊されており、天井石も多くが失われていましたが、側壁や奥壁は比較的良好的に残存していました。石室の規模は全長 3.8m、幅 1.2m、高さ 1.2m です。

石室の構造は、玄室の入口に立柱石を用いない無袖式の石室で、平面形が奥に向かって窄まった胴張りを呈する形状になっています。胴張りを呈する石室は、浜松市内の横穴式石室に多く認められる形状で、隣接する三河地方の石室と共通した特徴をもっています。



発掘された横穴式石室 石室の全長は残っている部分で全長 3.8m、幅は 1.2m と比較的小規模なものであった。天井石は失われているが、奥壁付近は良好に残存していた。石室の石材は地元産のチャートが用いられている。

石室の平面形は奥壁に向かって窄まった形状をしており、弧を描いた胴張りを呈する。胴張りは三河地方の石室で多く認められる特徴で、唐沢 1 号墳の石室は三河地方からの技術移入により構築されたと考えられる。

発掘作業中の横穴式石室 石室内には周囲から転落した石材が埋没していた。写真左手に写っている大型の石材は天井石である。調査開始時点で天井石の多くは失われていたが、本来は 4～5 石程度の天井石が架けられていたと推定される。

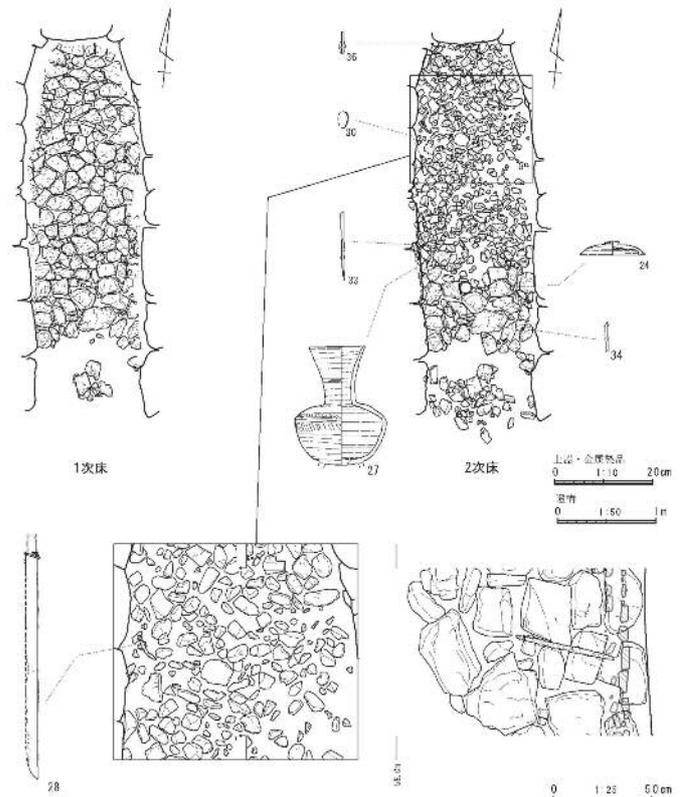
発掘作業に従事している作業員の多くは、豊橋市から現場に通っていたとのことであった。



石室側壁と床石 石室の奥壁は2枚の大型の石材を用いていた。側壁は上部に小型の石材を用いており、基底石はやや大型の石材が用いられている部分があるものの、大きさは不揃いである。

床面は上下2面認められることから、初葬後に追葬が行われたと考えられる。

遺物の出土状況 石室内から須恵器の摘蓋、長頸壺、鉄製の大刀、鏃、刀子が出土した。大刀は側壁に立て掛けられた状態で出土しており、追葬の際に片付けられたものと推定される。



(4) 出土遺物

横穴式石室内からは、須恵器の摘蓋や長頸壺が出土したほか、鉄製の大刀、鏃、刀子が出土した。大刀の貴金具には金銅が僅かに残っており、金銅装の飾大刀であったと考えられます。また、石室の開口部や周溝からは複数の須恵器が出土しました。須恵器は、坏身や摘蓋、フラスコ型瓶、高坏などがあり、その形状やいずれも灰白色の色調を呈する特徴などから湖西窯で焼成されたものと考えられます。須恵器は7世紀後半のものと考えられ、唐沢1号墳の築造された時期を示しています。



主な出土遺物 出土品の多くは須恵器であったが、石室内から鉄製の大刀や鏃、刀子が出土した。

球形の胴体の瓶は、フラスコ型瓶と呼ばれるもので、湖西窯産須恵器の特徴的な器種である。

大刀の貴金具には僅かにではあるが、金銅が認められることから、金銅装の飾大刀と考えられる。

古墳の規模は比較的小規模であるものの、飾大刀を所持していることから、一般的な群集墳の被葬者よりも階層的に優位にあると考えられ、在地の有力家長層などが想定される。

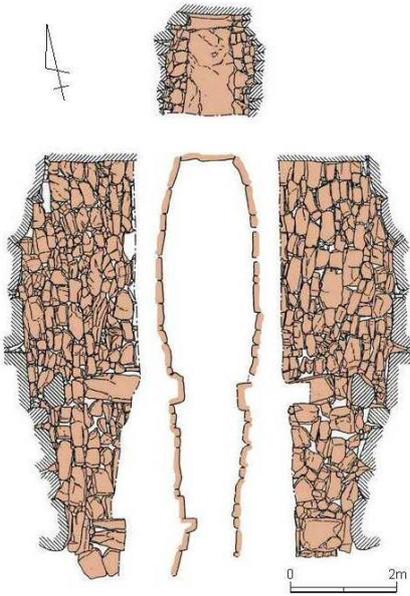
出土した鉄鏃と刀子 鉄鏃は鏃身部が幅広の平根式と、鋭利な形状の尖根式が混在する。一部の鉄鏃には矢柄部分の木質が残っていた。写真右下は刀子の破片である。

あたごひら
愛宕平古墳 (市指定史跡)

北区三ヶ日町都筑にある直径一mほどの円墳である。羨道部分が若干埋っているものの、全長七・五mの横穴式石室が完存している。

羨道と玄室の間には、楣石まへいしと呼ばれる石材が架けられている様子を観察できる。西山古墳と比べ玄室は細長い。

出土遺物がなく、築造時期を明確になしえないが、石室の特徴から七世紀前葉頃の築造と考えられる。



愛宕平古墳の石室

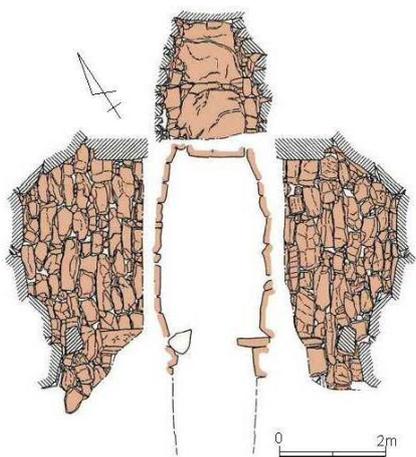


愛宕平古墳 全景

にしやま
西山古墳 (市指定史跡)

北区三ヶ日町釣にある直径一四・六mの円墳である。かつて二〇基以上の古墳が集中する古墳群であったが、現在は、蜜柑畑の中に一基だけが残されている。横穴式石室は羨道部が埋っているが、玄室は良好な状態で遺存している。

二〇一三年に一部を発掘調査し、石室の全長が八mほどであることが判明した。須恵器の高坏や甕が出土し、六世紀末頃の築造と考えられる。



西山古墳の石室



西山古墳 発掘調査状況